官窯・末館窯跡と造山遺跡群

藤原　正大（横手市教育委員会）

Ⅰ．末館窯跡の概要

末館窯跡（すえだてかまあと）は、横手市雄物川町今宿字末館～大沢字藪沢目の一体に所在する奈良時代の須恵器窯跡です。この窯跡はＡ地点窯跡とＢ地点窯跡の２ヶ所の窯跡から構成されます。末館Ａ地点窯跡（以下、Ａ地点窯跡）は昭和 32 年に奈良修介・豊島昂氏が、末館Ｂ地点窯跡（以下、Ｂ地点窯跡）は昭和 34 年に大和久震平氏が発掘調査を行いました（大和久 1963、奈良 1967）。Ａ地点窯跡は秋田県で初めて窯跡の学術調査がおこなわれた遺跡としても知られています。

末館窯跡出土の須恵器については、これまで考古学的に検討が重ねられており（船木 1985、島田 2005 など）、その特徴から横手盆地への律令国家の進出に伴って雄勝郡や平鹿郡が置かれ、郡の役所である平鹿・雄勝郡衙や古代城柵である雄勝城が設置される奈良時代、特にその中頃を中心に操業した窯跡であることが明らかになりました。今回の報告では、再整理の過程で発見された出土資料を追加して提示するとともに、その特徴や意義について検討していきます。

Ⅱ．末館窯跡の特徴

末館窯跡は横手市役所雄物川庁舎から西南西約 2.8km の出羽丘陵東端部にあり、眼下には雄物川が北流しています（位置については島田報告を参照）。現在、遺跡周辺には秋田県道 36 号（大曲大森羽後線）が走るほか、周辺には温泉施設のえがおの丘があります。Ａ地点窯跡はこのえがおの丘付近に、Ｂ地点窯跡は県道 36 号西側のりんご畑付近にあります。昭和 35 年（1960）に刊行された『秋田県史』考古編によれば、「（前略）又、この末館附近に窯址と思われる地点三ヶ所以上が出土品から考えられ、また現在道路を切り開いた側面に楕円形の切断面を見せているもの一ヶ所あり、この地の窯址群であることはあきらかである。」とあり（奈良 1960）、この一帯にほかの窯跡が存在した、もしくは未発見の窯跡が存在することが想定されます。また、秋田県内で奈良時代の遺跡が最も集中する造山遺跡群は、末館窯跡から西約 2.5km の非常に近い距離にあります。

以下では窯跡の構造、器種、製作技法についてまとめ、末館窯跡の特徴を考えていきます。

1.　窯跡の構造

まず、調査の詳細な記録が残っているＢ地点窯跡についてその窯構造を見ていきます（**図 1**）。記録によれば、窯は半地下式の構造（斜面を掘り窪めた後に粘土で天井を架構する構造）であり、窯の規模は全長 8.55m で、焼成部長約 1.7m、幅約 1.4m、残存高 0.6m を計り、床面の傾斜角度は約 24 度です。焼成部は作り直されて使用されていたとあり、天井部は窯体内に崩落していました。窯跡側面はスサ入り粘土（藁屑を混ぜ込み亀裂を防止する粘土）で補強され、その上面は青く、還元面で硬化していました。

また燃焼部手前側には灰原（焼成部から灰とともに焼成時の失敗品を掻き出した跡）が存在したと考えられますが、調査はされていません。

焼成部内からは多量の須恵器が出土しましたが、破砕された残片や欠損品が多く、スサ入り粘土に食い込んでいるものや粘土が破片に固着しブロック状をなしていたとあります。これについては、破片は窯底形成物質の一部として意識的に埋め込まれたものであり、底面の急傾斜による土器の転落を防ぐ意味合いもあるのではないかと報告されています。

一方のＡ地点窯跡では、調査時の図面等は残されていませんが、長さ2m、幅1mであり、床面の傾斜角度は約30度であったといいます。焼成部には50cm間隔で3ヵ所にＬ字状の磚（煉瓦）が置かれ階段状をなし、灰原の一部も確認していると報告が残ります。窯構造については記述がありませんが、末館 A 地点窯跡はスサ入り粘土を用いず、粘土のみで構築されていたとあり、地山をくり貫いて構築した地下式構造の可能性もあると考えます**（図 4）**。

2. 生産された器種

まず、焼成された器種についてそれぞれ見ていきます。A 地点窯跡は杯・椀蓋、短頸壺蓋、高台付椀、杯、高台付盤、鉢、擂鉢、長頸壺、甕の 10 種類を確認できます**（図 2～3、以下新出資料以外の土器実測図は島田 2005 から引用）**。一方、B 地点窯跡でも同様に多種多様な器種が出土し、杯蓋、短頸壺蓋、高台付杯、杯、双耳杯、高台付盤、盤、短頸壺、横瓶、長頸壺、甕の 11 種類を確認できます**（図 5～11）**。このように、末館窯跡では、食膳具の椀や坏、高台付杯とそれに伴う蓋のほか、大型の食膳具である高台付盤や、長頸壺・甕などの貯蔵具といった多様な器種が焼成された点に大きな特徴があるといえ、いずれの須恵器も非常に丁寧なつくりをしていることがわかります。このことから、末館窯跡の製品はは多様な器種を必要とした施設への供給が想定され、さらに品質管理も行われていたことが窺われます。

A 地点窯跡では擂鉢などの特異な器種が見られますが、ここから出土した短頸壺蓋は、「上野型短頸壺蓋」と呼ばれるもので、奈良時代前半（8 世紀第 1～2 四半期頃）にかけて成立し、上野国（現在の群馬県）に集中して見られる器種です。この器種は秋田城 SK1031 土取穴埋土や秋田市手形山2 号窯跡出土の須恵器に類例があります。

3. 製作技法

次に製作技法に目を向けると、ふたつの窯跡では異なる技法が用いられています。たとえば、杯類は回転台の上で成形し、ヘラ状工具で回転台から離脱させますが、その後の底部の仕上げ（再調整）の技法は、A 地点窯跡は回転ヘラケズリ（ヘラ状工具で底部の粘土をそぎ落とし、形を整える）であるのに対して、B 地点窯跡では底部を撫でることで整えられています。このほかにも、蓋に付く摘みの形状が A 地点窯跡ではリング状なのに対して、B 地点窯跡では擬宝珠もしくはボタン状であるなど、明確な違いが見て取れます。このような製作技法の違いから、それぞれの窯跡で須恵器製作をおこなった工人集団は「工房」としての一定のまとまりをもっていたと考えられます。なお、A 地点窯跡は東山道系の、B 地点窯跡は北陸系の工人によって操業された可能性が指摘されています（島田 2005）。

Ⅲ. 末館窯跡の操業年代

この末館窯跡はどの時期に操業したと考えられるのでしょうか。ここでは、先行研究に沿って年代を検討していきます。A 地点窯跡出土杯類は、前述のような底部に再調整が行われている割合が高いこと、

また杯類の法量分化が著しく大中小がみられることから秋田県内の須恵器窯跡の中でも最古相であると考えられます。また、生産された器種に注目すると、高台付盤は秋田県内でもB地点窯跡や秋田城跡第38次築地崩壊瓦層でしか確認されないことから古い年代に使用された器種と考えられます。これらのことからA 地点窯跡の操業開始年代は、奈良時代中頃の古い段階と考えられますが、遺物の観察から、再調整の技法に粗雑化の傾向がみられることから、やや時間幅を持っていることが想定されます。以上から、A 地点窯跡は 8 世紀中頃でも古い様相と新しい様相がみられる、操業期間に幅をもつ窯と考えられます。

B地点窯跡も杯類の法量分化がみられ、A地点窯跡と同様に高台付盤などの奈良時代でも古相に位置づけられる器種が認められることから、8世紀中頃の操業年代が考えられます。この操業年代については今後さらに検討し、操業契機を考える必要があります。この時期には天平五年(733)に雄勝村に郡を置いたという建郡記事や、天平宝字三年(759)の雄勝城創建記事が『続日本紀』にあり、関連性が考えられます。

Ⅳ. 末館窯跡で生産された須恵器と造山遺跡群

この末館窯跡で生産された製品は、どこに供給されたのでしょうか。

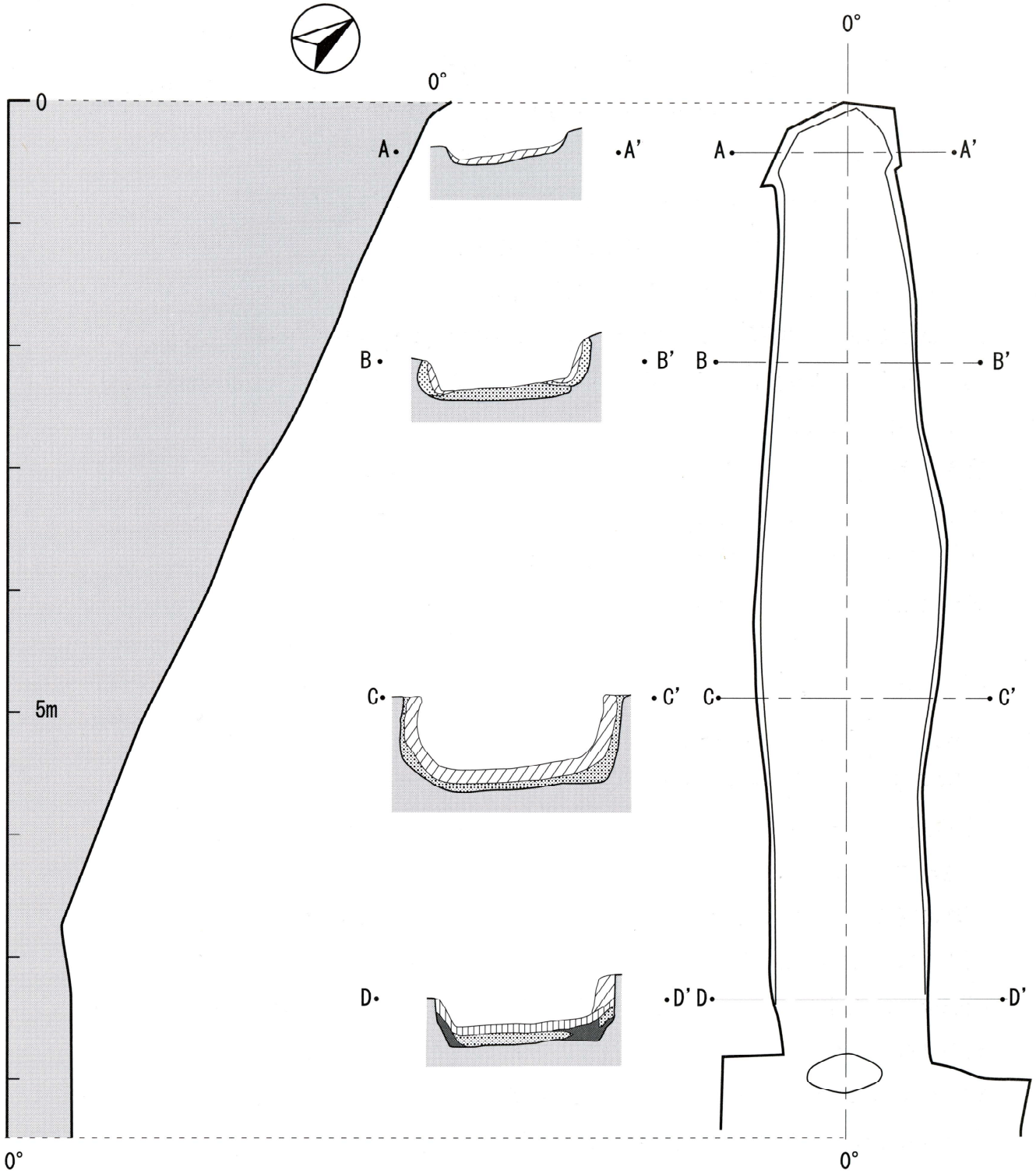
現在までのところ、前述の造山遺跡群では奈良時代の須恵器が多く出土しており、その中には末館窯跡の製品と思われる例が何点か確認されています。南田東遺跡(みなみだひがしいせき)SI01 竪穴建物跡ではB地点窯跡のものと類似する小型の須恵器杯が出土しているほか、首塚遺跡(こうべづかいせき)では、奈良時代の須恵器が表採されており、そのなかに末館窯跡の製品と胎土・形態が類似する杯が見られます。また、近年では、昨年度雄勝城・駅家研究会によって調査が行われた十足馬場西遺跡(とあしばばにしいせき)の竪穴建物跡からも、A 地点窯跡と類似する須恵器蓋が出土しており注目されます。ただ、全体を見ると明確に末館窯跡の製品であるといえる出土例は多くはありません。

末館窯跡の製品の供給先については、窯の性格にもかかわる問題のため今後さらに検討を進めていく必要があると考えています。また、造山遺跡群で出土する須恵器は形態や製作技法がバリエーションに富んでおり、さまざまな地域から持ち込まれた搬入品が多くあると考えられ、これらがどこから持ち込まれたものかについても今後検討が必要です。

Ⅴ. まとめ

これまで、末館窯跡の特徴についてみてきましたが、①末館窯跡では多様な器種の須恵器が焼成され、多様な器種を必要とした施設へ供給されたと考えられること、②生産された須恵器が非常に丁寧なつくりで品質管理がなされていた可能性があること、③その操業開始年代は奈良時代中頃に求められ、律令国家の横手盆地への進出と軌を一にしていること、④現時点で造山遺跡群に出土例が集中することを確認しました。このような特徴は、末館窯跡が官衙的施設と何らかの関係がある窯であったことを背景とするものと考えられますが、末館窯跡が表題にあるような官衙的施設によって運営される「官窯」であったかは慎重に検討が必要です。

末館窯跡は、奈良時代の横手盆地に関するさまざまな問題について考えるための貴重な考古学的資料といえます。



スサ入り青色粘土　木炭スサ入り粘土　赤色焼土

灰色火山灰粘土　黒色土

※雄物川町郷土史資料第3集再トレース

0　S=1/50　2m

図１　末館Ｂ地点窯跡　実測図（島田 2005 から引用）

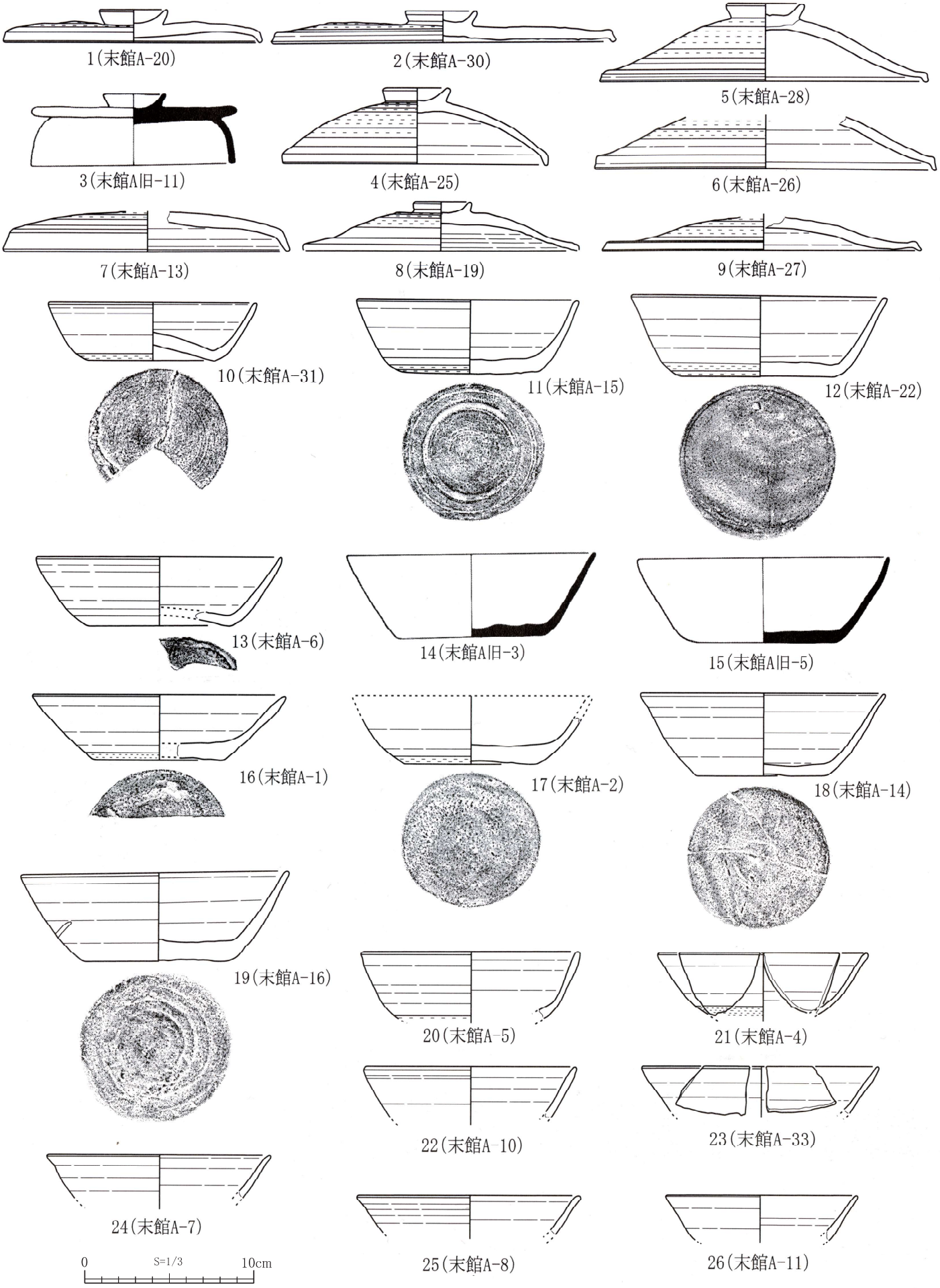


図 2　末館 A 地点窯跡出土須恵器（1）

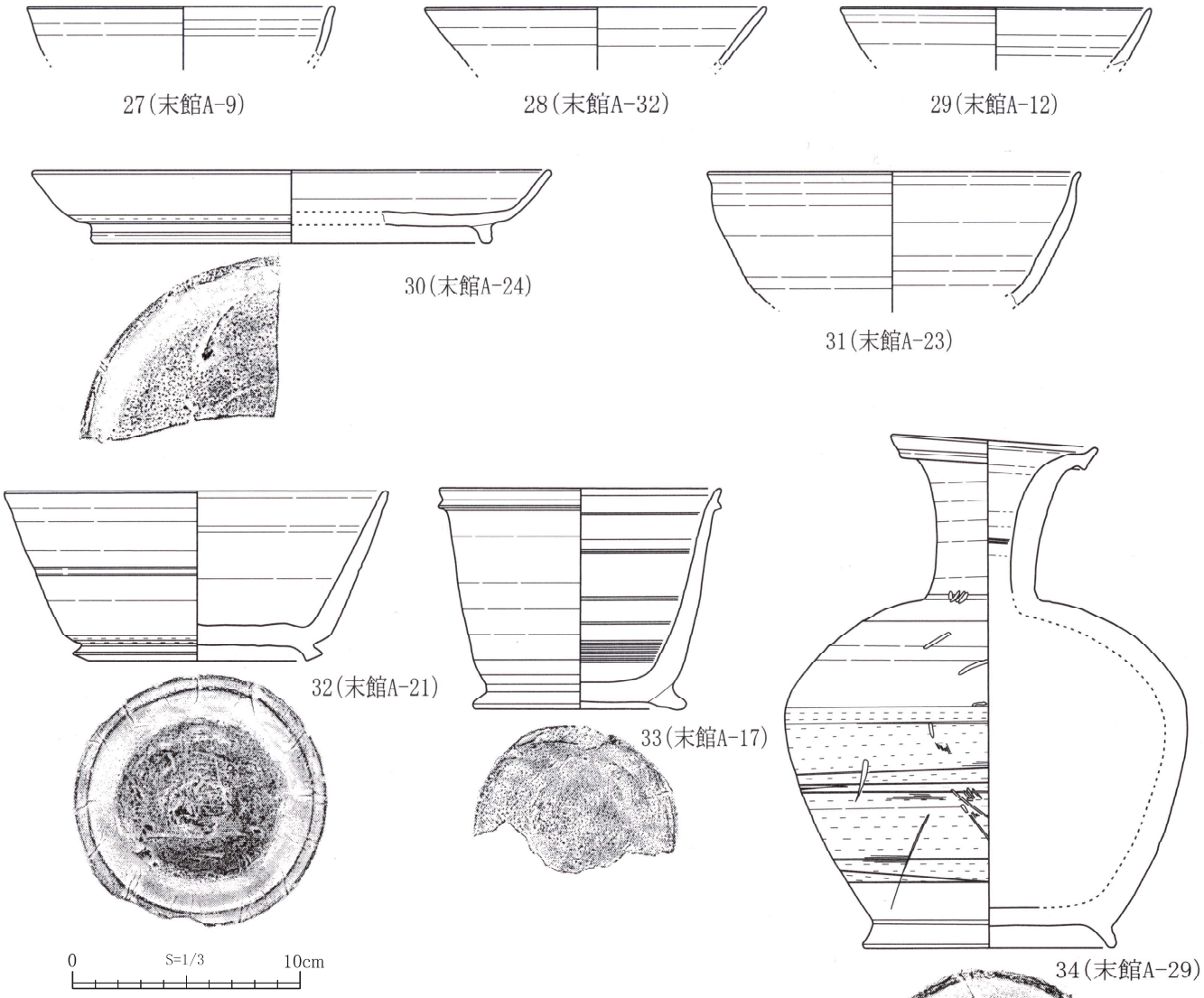


図 3　末館 A 地点窯跡出土須恵器（2）

図 4　末館 A 地点窯跡調査風景（『秋田県史』考古編から引用）

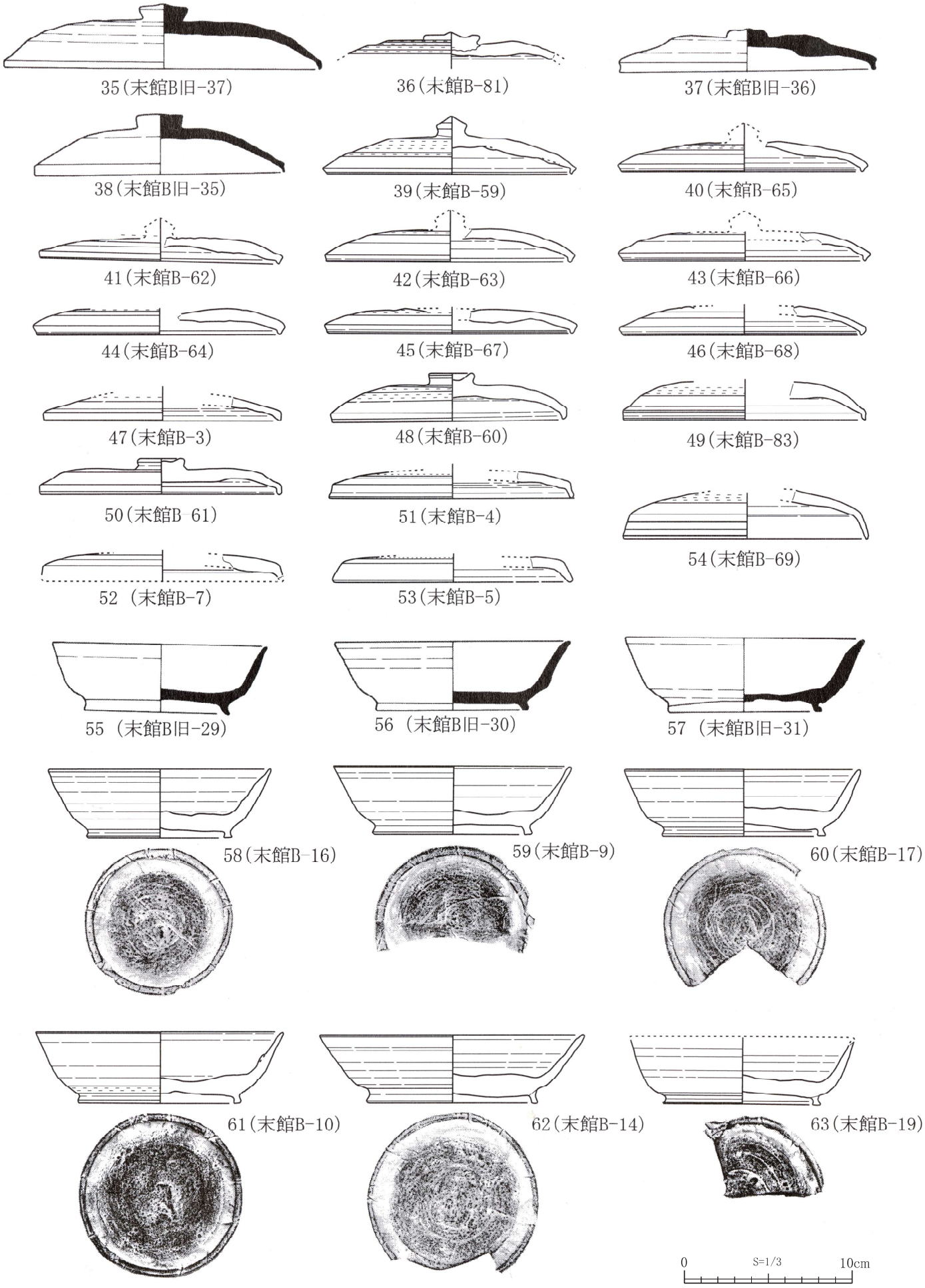


図 5 末館 B 地点窯跡出土須恵器 (1)

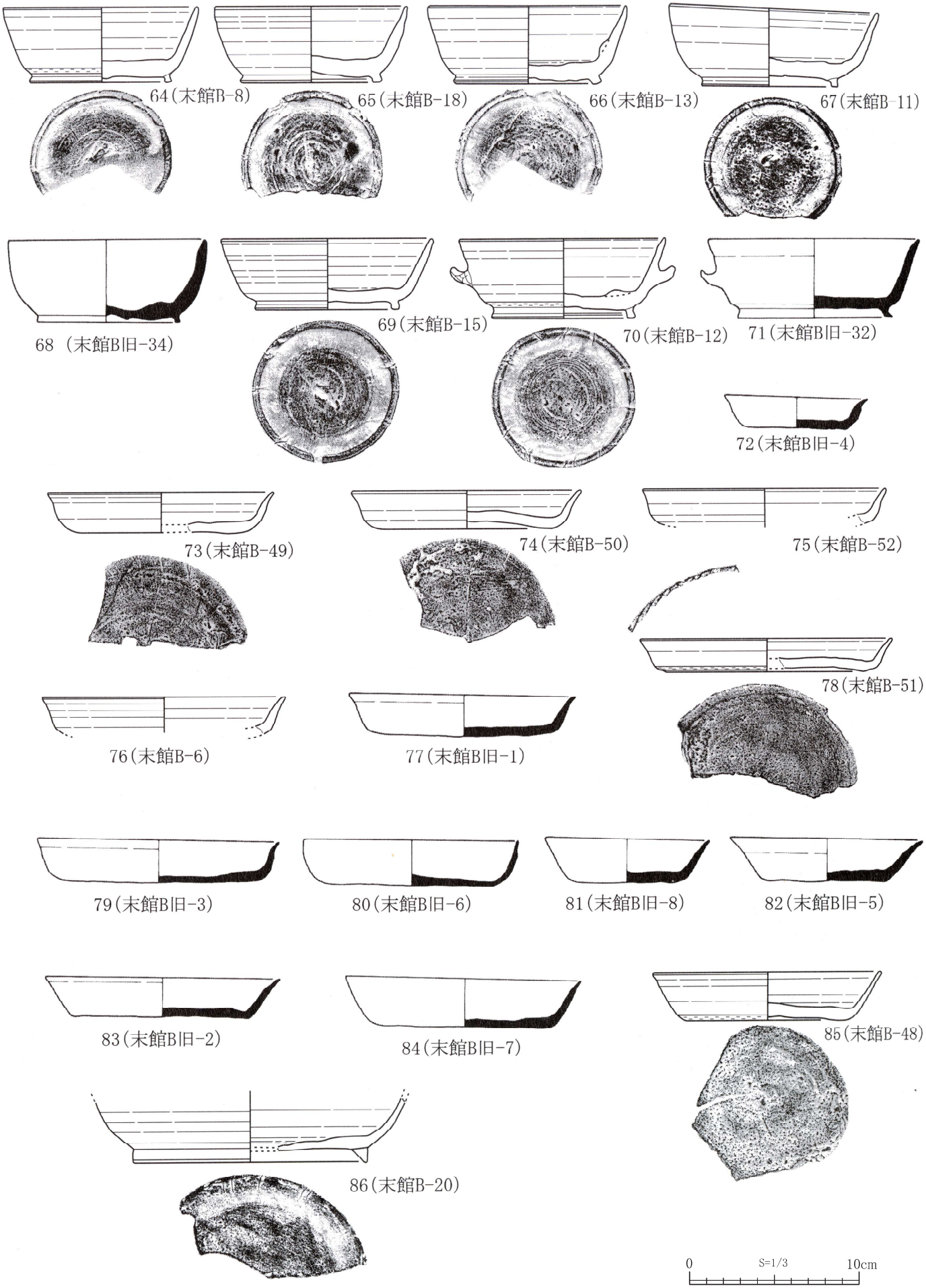


図 6　末館 B 地点窯跡出土須恵器（2）

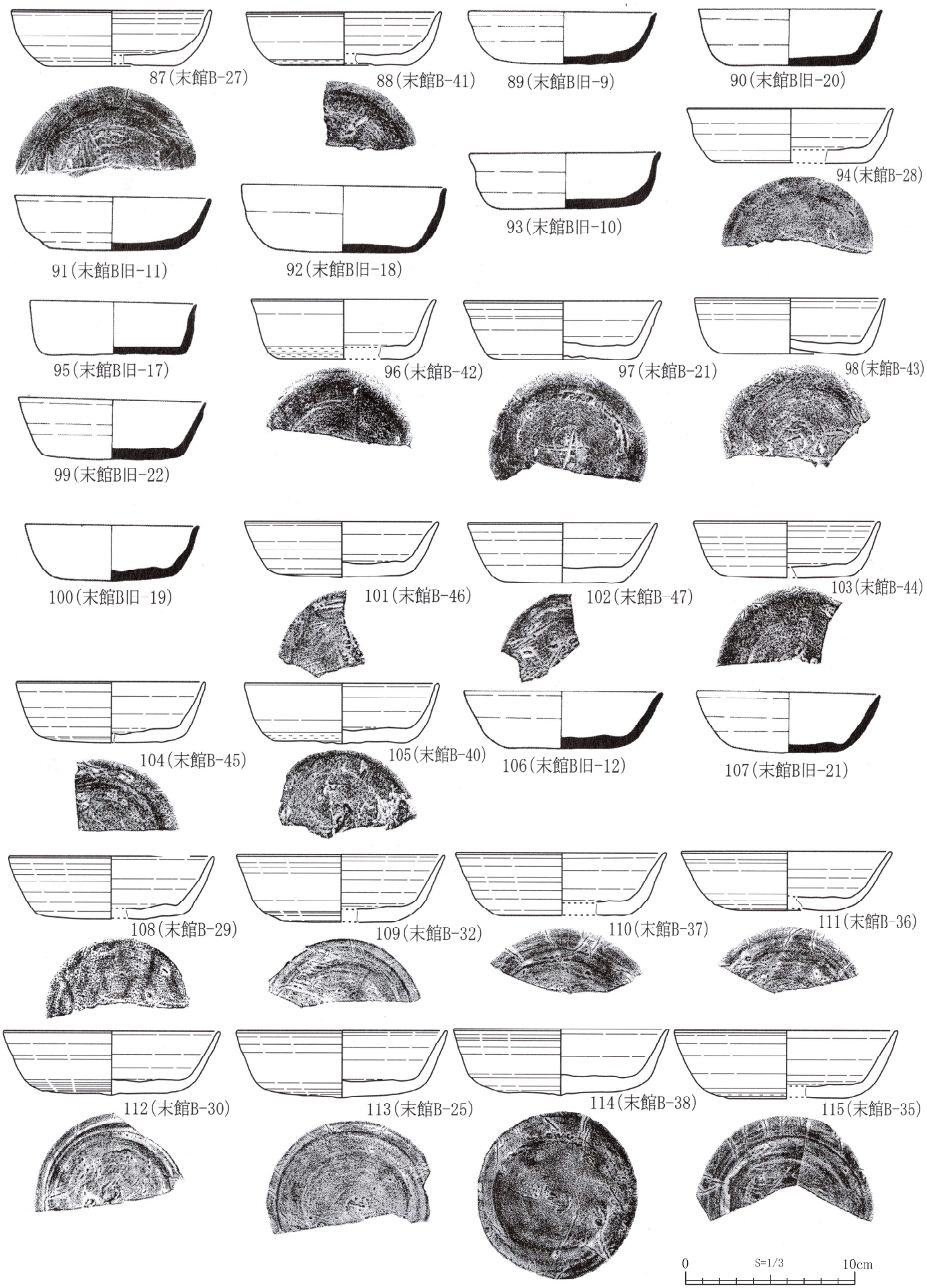


図 7　末館 B 地点窯跡出土須恵器（3）

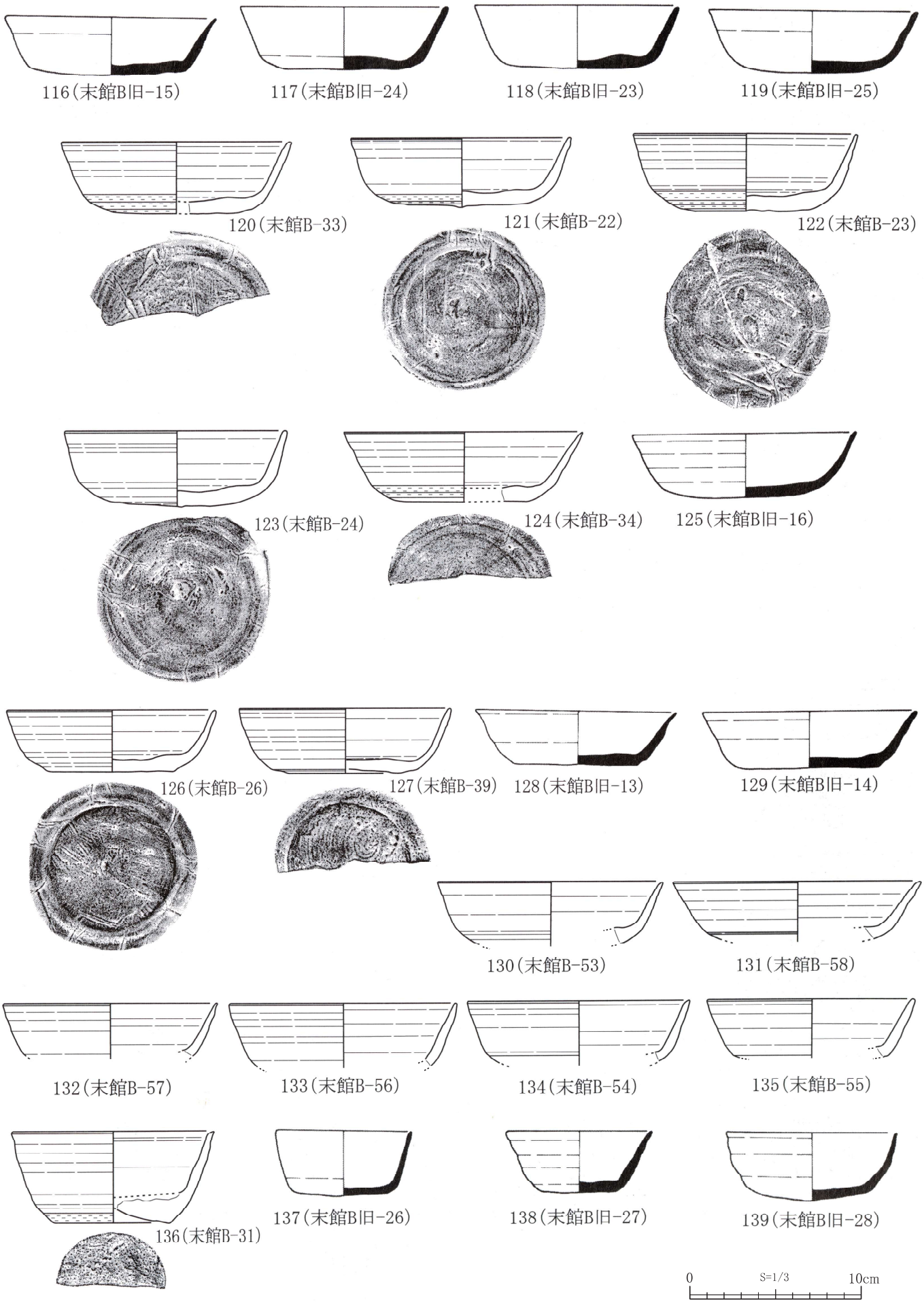


図 8　末館 B 地点窯跡出土須恵器（4）

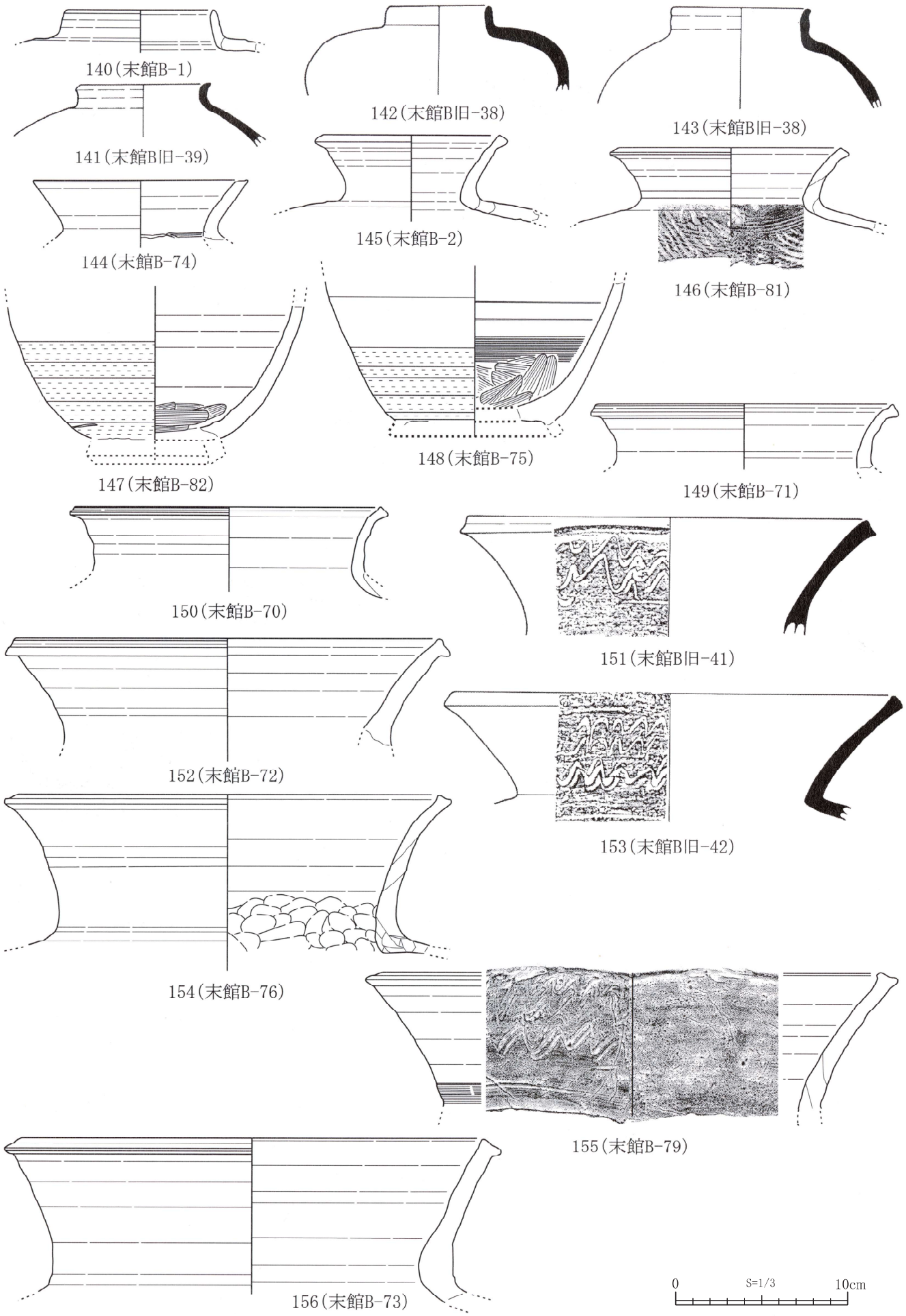


図 9　末館 B 地点窯跡出土須恵器（5）

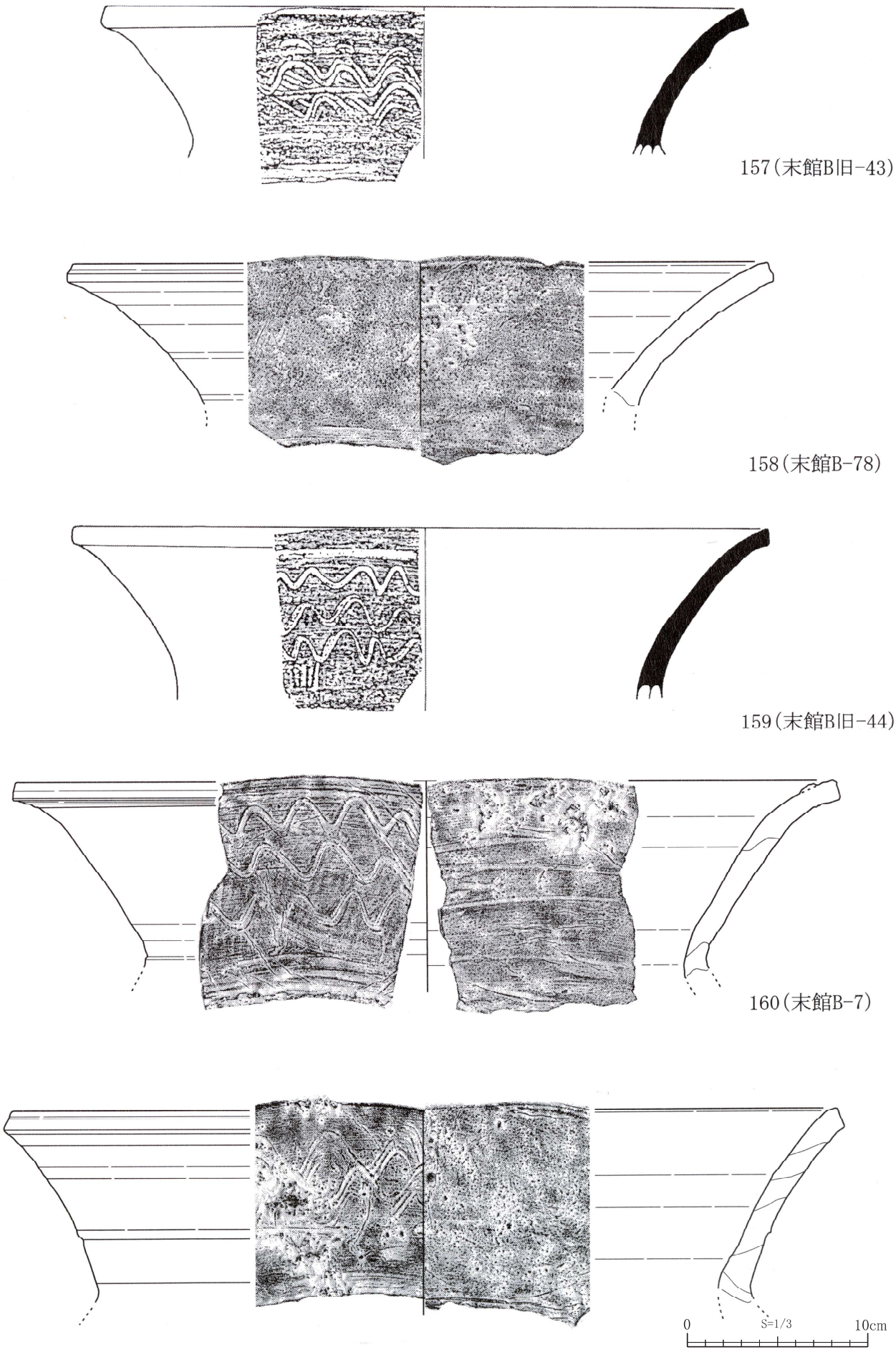


図 10　末館 B 地点窯跡出土須恵器（6）

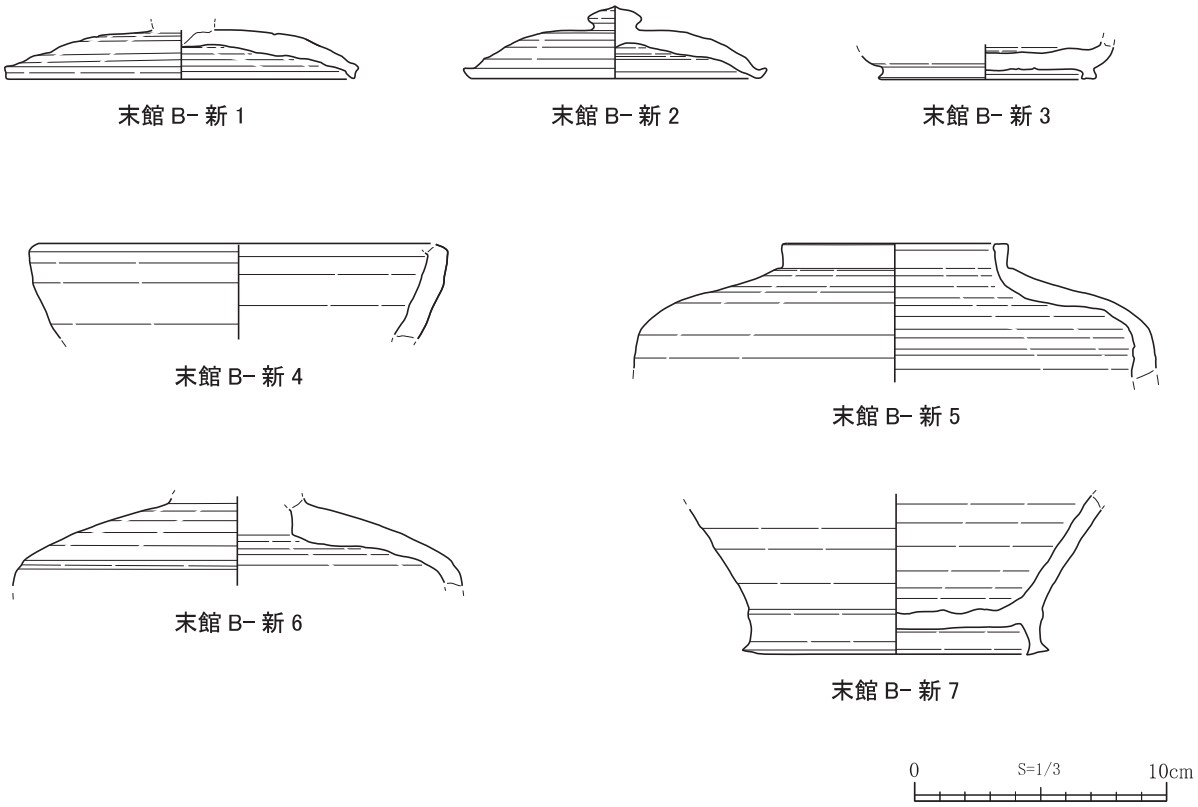


図 11　末館 B 地点窯跡出土須恵器（7）（新出資料）

※実測図のうち断面が白抜きの須恵器は、 現在横手市教育委員会で所蔵しているものである。黒塗りの実測図の須恵器は現在所在不明であり、各報告（大和久 1963、奈良・豊島 1967 など）から引用した。 今回提示した新出資料の中には黒塗りの実測図の須恵器と対象が可能と考えられるものが数点あり、 今後これらを含めて特徴・年代等について検討を進めていく。

参考文献

岩見誠夫・船木義勝 1985「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」『秋大史学』32 pp.1-27
大和久震平 1963「平鹿郡雄物川町末館窯址発掘調査報告」『雄物川町郷土史資料』第 3 集
雄物川町文化財委員会
島田祐悦 2005「横手盆地の奈良期における須恵器編年」『秋田考古学』49　秋田考古学協会 pp.35-88
船木義勝 1985「横手盆地の須恵器窯」『払田柵跡 - 政庁編 - 』秋田県文化財調査報告書第 122 集
秋田県教育委員会払田柵跡調査事務所 pp.120-133
奈良修介 1960「窯址」『秋田県史』考古編　秋田県　pp.202-204
奈良修介 1967「窯跡」『秋田県の考古学』吉川弘文館　pp.144-149
奈良修介・豊島昂 1967『秋田県の考古学』吉川弘文館